

追 悼



故 金子好宏 先生 略歴

(大正11年1月22日生～平成28年2月12日没)

<職歴>

- 昭和17年 3月 第八高等学校理科乙類卒業
昭和20年 9月 東京帝国大学医学部医学科卒業
昭和20年11月 東京大学医学部第二内科に勤務，佐々・美甘・上田教授に昭和48年6月まで師事。副手・助手・講師を歴任。
昭和26年8月医学博士。
この間，昭和33年2月～36年6月，昭和37年6月～38年8月，米国クリーブランド市クリーブランドクリニックに留学，高血圧研究に従事
昭和48年7月 横浜市立大学医学部教授(内科学第二講座)
昭和62年3月 横浜市立大学医学部教授を定年退職
昭和62年4月 国家公務員共済組合横浜南共済病院顧問
西横浜国際病院名誉院長に就任
昭和63年5月 第12回国際高血圧学会(京都)組織委員会会長に就任
平成5年 6月 西横浜国際病院退職，横浜高血圧研究センター(私立)を開設し，所長就任
平成8年 4月 横浜市立大学名誉教授

<学会活動>

- 昭和53年9月，第1回日本高血圧学会(横浜)会長，日本高血圧学会・国際高血圧学会理事，日本腎臓学会監事，日本内科学会・循環器学会・動脈硬化学会・脈管学会・老年病学会・成人病学会各評議員，厚生省医師国家試験委員，厚生省中央薬事審議会委員，神奈川県成人病対策委員，横浜市障害審査委員等に就任
日本高血圧学会・日本腎臓学会名誉会員，日本内科学会功労会員

●日本腎臓学会

- 第7回日本腎臓学会東部学術大会大会長：1977年5月19日・20日神奈川県民ホール
・学術評議員：1963年9月29日～1994年3月31日
・監事：1977年12月4日～1987年10月31日
・名誉会員：1994年4月1日～

金子好宏横浜市立大学名誉教授のご逝去を悼む

横浜労災病院院長

(横浜市立大学循環器・腎臓内科名誉教授)

梅村 敏

金子好宏先生が2016年2月にお亡くなりになりました。先生は日本高血圧学会の設立の中心的役割を果たされ、1978年の第1回日本高血圧学会学術総会会長を務められました。

我が国の高血圧研究をけん引してこられた先生の死は、「巨星落つ」の言葉通りであります。

先生は1945年東京大学医学部をご卒業。1950年ごろ、東京大学第2内科で大島研三先生の指導する腎・高血圧グループで研究に従事されました。高血圧患者の静脈血を採り、その血清を家兎に静注し、腎機能低下患者で昇圧作用を示す場合があることを確認されたのは、Bioassay法ができる10年以上前でした。1958年から1963年には高血圧研究のメッカ、米国Cleveland Clinicにご留学し、Dr. Page, Dr. McCabbinの下で「高血圧とrenin-angiotensin系」について研究されました(この間に一時帰国して現在の奥様と結婚されました)。帰国後、ヒト血漿をラットに静注するbioassayで血漿レニン活性(PRA)測定法を開発されました。1965年ごろ腎静脈採血でレニン遊出量を測定することに成功され、さらに腎からのレニン遊出が腎血流量でなく、腎灌流圧の低下で生じることを証明し、腎血管性高血圧の血圧上昇機序を示唆されました(J Clin Invest 46:705-716, 1967.)。この報告は、世界で高い評価を受け、英国のDr. Leeは、その著書“Renin and Hypertension”で“An important series of observations has recently been made by Kaneko et al.(1967)”と書いて、その論文を紹介しました。彼はその中で、“These important findings demonstrate that the threshold of arterial pressure for renin release in renovascular hypertension is shifted to arrange much higher than in the normal. I consider this paper a fundamental contribution to the thesis that in renovascular hypertension renin release may be inappropriate. The importance of this Japanese work cannot be overemphasized”と評価しています。また、高名なDr. Goldblattは、彼の論文(Circ Res 1972;31:74-82.)で、ヒトで腎からのレニン遊出量を測ったのは金子先生らが世界で最初であることを記しています。1970年、高血圧患者における腎のレニン遊出が自律神経遮断剤の投与によって有意に減少することを見出し、報告されました(Circ Res 1970;27:97-103)。また、当時使用できるようになったβ遮断剤のプロプラノロールの影響を調べ、β遮断薬の投与が高血圧患者で腎のレニン遊出を有意に減らし、PRAを低下させることを見出されました。金子先生はこの間のことを振り返られて、「一時期世界の最先端で仕事ができたと幸運に恵まれたと思ひ、満足し、ありがたく思っている。そして、これらの仕事を可能にしてくれた共同研究者の人たちに深く感謝したいと思う」と述べられています(レニン・アンジオテンシン系と高血圧. 先端医学社, 1998)。

1973年には横浜市立大学第二内科の教授にご就任されました。その後、「それまでは、高血圧に関する研究は多くの関係学会に分散して発表されていましたが、高血圧をテーマに研究を推進し、もって高血圧症の診断・予防・治療面の進歩を図る」という趣旨の基に、尾前照雄教授ら10名の教授を発起人として、日本高血圧学会(JSH)を設立されました。

そして、第1回日本高血圧学会学術総会が会長である金子先生の下、横浜で開催されました。

その時の招請講演は、恩師の Cleaveland の Dr. James W. McCubbin 先生で、“A Personal View of the Role of the Sympathetic Nervous System in Hypertension” の演題で、自律神経一体液調節の関係、“reset” 説について話され感銘を受けました。

日本高血圧学会は質の高い演題を一会場で時間をかけて発表するという金子先生たちの考えでスタートしましたが、その後、学会員も増え、多くの演題を複数の会場で発表するようになりました。時代の趨勢からやむを得ないことではありましたが、金子先生は学会の質が落ちたと嘆いておられたとのことでした。金子先生は学会場でいつも質問の先頭に立ち厳しい質問をされ、怖い思いをされた研究者が多かったと思います。その質問の内容も「新知見は何なのか、臨床的意義は何なのか」となかなか厳しくも、重要なものでした。

一方、先生と酒宴の際など気軽に話をさせていただくときにも、純粹に、高血圧研究や日本高血圧学会に愛情と情熱を注がれている姿勢がひしひしと感じられました。これらにも通じることですが、先生の師でもある Dr. Page の書かれたと思われる「Dr. Page の教訓」(以下)が当教室の研究室の壁に貼られていました。

「<Dr. Page の教訓>

1. 自ら手を下さなければ真の研究はできない。
2. 委員会にはなるべく出るな。
出席する委員会の数と学問的業績は反比例する。
3. 論文は学者の生命である。
新知見が必要だが、誤りは許されない。繰り返し検討せよ。
同じことを繰り返して言うな。
一つの図、表の発表はただの一度に限れ。
数が多すぎてはだめ。論文は質の高さで評価される。
論文の数と質とは反比例する。
4. 少数の一流学会だけに出席し、
一つの研究は一つの学会だけに出せ。
5. 学会は討論が重要である。
研究者は年齢・地位に関係なく、学問の前には平等である。
6. 専門領域の世界の重要論文は自ら読んで理解せよ。
重要な文献を知らないということは許されない。
7. 学生主催は質素を旨とせよ。
むやみに寄付をうけてはいけない。」

横浜私立大学第二内科教授着任早々、医局会で「第二内科を留学経験者と10年以上のベテラン専門家がごろごろいる医局にしたい」と抱負を述べ、まさに「鉄は熱いうちに打て」の精神を実践されました。「自分の思う通りに夢中で走ったという思いがある」と第二内科教室50年誌の中で述べられています。さらに「当時の教室員から9名の教授が誕生している。あの14年間は私にとっては幸福な期間であったと今でも感慨無量である」「優秀な教室員、サポートをいとわない教室同門の先生方がある限り、第二内科学教室はさらに発展すると信じている」と述べられています。

謹んで金子好宏先生のご冥福をお祈り申し上げます。